

Blitzen Times

April.2025
Vol. 91



Race Report

- 4.13 MTB 菅蒲谷 XCO
- 4.27 東日本ロードクラシック
- 5.06 和歌山城クリテリウム
- 5.08-11 ツール・ド・熊野
- 5.18-25 ツアー・オブ・ジャパン

雨の激戦を制す！

沢田時、菖蒲谷XCOで雪辱V

4月13日、兵庫県・菖蒲谷森林公園で開催された Coupe du Japon XCO。昨年の雪辱を誓った沢田時が、泥と雨の過酷なコンディションの中、冷静なレース運びで見事優勝。2週間後のアジア選手権へ弾みをつけた。

4月13日、兵庫県たつの市の菖蒲谷森林公園で Coupe du Japon XCO が開催。男子エリートには54名が出走し、沢田時はアジアチャンピオンジャージを着用して臨んだ。

レース当日は朝から雨。コースは泥濘み、当初の7周から6周に短縮されたが、依然として18・48キロの長丁場。昨年、雨の菖蒲谷で唯一勝てなかった沢田にとつては、絶好のリベンジの舞台となった。

「雨の菖蒲谷は昨年の悔しさが残る。今日は絶対に勝ちたい」と語った沢田は、スタートから積極的に先頭を奪取。悪路の中、自分のペースを守ることが勝利のカギとなる。2周目には松本一成（TEAM RIDE MASHUN）と先頭バックを形成し、3周目には竹内遼（MERIDA BIKING TEAM）、シエリンの野暮然新も加わり、激しいトップ争いが展開された。

中盤、竹内が下りで一時トップに立つも、沢田は慌てず冷静に対応。上りや自転車を押す場面で力を発揮し、5周目で再び先頭へ。最終周回もそのまま独走し、2位竹内との差を約90秒に広げてガッツポーズでフィニッシュラインを駆け抜けた。

「人生で一番ハードなマッドレースだった」と語った沢田。昨年の悔しさを晴らし、過酷なコンディションでの勝利は大きな自信となった。

リザルトは1位沢田時（1h25'34"）、2位松本一成（1h27'17"）、3位鈴木来人（1h28'48"）。沢田の勝利は、泥と雨を制した強さの証となった。



アコスタ2位！ 健闘の東日本クラシック

Jプロツアー第4戦・東日本ロードクラシックが4月27日、群馬サイクルスポーツセンターで開催された。宇都宮ブリッツェンは5人で挑み、ルーベン・アコスタが僅差の2位、岡篤志が4位、谷順成が6位と健闘。チームの好調ぶりを証明した一戦となった。

第59回東日本ロードクラシックが、群馬サイクルスポーツセンターで開催された。6キロのサーキットを25周、総距離150kmという過酷なコースに全国から132名が集結。宇都宮ブリッツェンは谷順成、岡篤志、ルーベン・アコスタ、武山晃輔、花田聖誠が出走。規定では8名出走が可能な中、5名での挑戦となったが、チームランキング首位の意地と団結力でレースに臨んだ。

序盤から各チームが積極的にアタックを仕掛ける展開。ブリッツェンは集団前方をキープし、常に主導権を握る走りを見せた。11周目にはアコスタ、岡、谷が加わる20名の逃げが形成されるが、集団が吸収。続く展開で阿部高之（Velocio 松山）、レオネル・キンテロ（ウィクトワール広島）が抜け出すも、これも長続きせず、16周目には岡、谷、アコスタを含む12名の有力逃げグループが誕生。勝負はこのメンバーに委ねられた。レース終盤、23周目でアコスタがアタック。山本元喜（KNAN Racing Team）、エリオット・シユルツ（ウィクトワール広島）とともに3名の先頭集団を形成する。岡は追走から抜け出し合流を狙うが届かず、勝負は先頭3人のスプリントへ。フィニッシュは写真判定となり、アコスタは僅差で2位となった。アコスタにとってJプロツアー初の表彰台となり、チームにとっても価値ある結果となった。

岡は4位、谷は6位でゴールし、ブリッツェンはトップ10に3人を送り込む健闘を見せた。武山も17位、花田も31位と、全員が完走を果たした。少人数での戦いながら、チームワークと個々の力を最大限に発揮したレース運びだった。

レース後、鈴木真理監督は「数的不利の中で有利な展開を作れた。ルーベンが優勝争いできたことで、今後のUCIレースに向けて大きな収穫になった」とコメント。アコスタも「とてもハードなレースだったが、最後まで脚が残りました。コンディションも上がっている。次のツール・ド・熊野に向けてモチベーションが高まっている」と語った。

今季、ブリッツェンはJプロツアーチームランキング首位を維持し、個人ランキングでもリーダー争いに名を連ねている。真岡芳貴ロードレースでフォン・チュンカイが優勝、宇都宮清原クリティウムで岡が2位、西日本ロードクラシックで沢田が2位になるなど、チームは好調を維持。今回の東日本ロードクラシックでも、少数精鋭ながら存在感を發揮し、今後のUCIレースへ弾みをつける結果となった。

ツール・ド・熊野、ツアー・オブ・ジャパンとUCIレースが続く。今回の好成績を追い風に、さらなる飛躍を目指すブリッツェンの走りに期待が高まる。チーム一丸となって勝利を目指す彼らの挑戦は、まだまだ続く。





和歌山城クリテリウム

和歌山城クリテリウムで幕を開けた5日間の戦い。宇都宮ブリッツェンは、エース岡篤志を中心に、谷順成、沢田時、ルーベン・アコスタ、武山晃輔、花田聖誠の6名で挑んだ。クリテリウムはツール・ド・熊野のプレイベントとして初開催。レースは終盤まで集団のまま進み、岡はスプリントで37位。花田が落車で鎖骨骨折し、熊野本戦を欠場するアクシデントもあった。



熊野決戦、 岡篤志が総合3位表彰台へ

和歌山城クリテリウムから始まった5日間の激闘。宇都宮ブリッツェンはエース岡篤志を中心に、波乱と意地のレースを展開した。山岳や雨、落車など多くの試練を乗り越え、岡はツール・ド・熊野で総合3位表彰台を獲得。チームの団結と挑戦の軌跡を振り返る。



第1ステージ 印南かえる橋周回コース
5月8日から始まったツール・ド・熊野は全4ステージ。初日の印南かえる橋周回コースでは、岡がスプリントで2位に入り、総合でも2位と好発進。花田の不在で5人となったが、チーム一丸でボーンスタイム獲得や集団コントロールに努めた。

第2ステージ 古座川清流周回コース

第2ステージの古座川清流周回コースは、細かなアップダウンと狭い道幅が特徴。雨と大落車という厳しい展開の中でも、宇都宮ブリッツェンは全員がトップと10秒差の集団でゴール。岡は総合3位をキープし、チーム総合でも2位につけた。鈴木真理監督は「誰も落車に巻き込まれず、明日につなげるレースができた」と振り返った。





第3ステージ 熊野山岳コース

第3ステージは熊野山岳コース。今大会のクイーンステージと呼ばれる難関で、千枚田の上りを含む周回で集団は絞られた。岡は先頭20名に残り、最後の平坦区間での逃げを許すも、5位でフィニッシュし総合3位を堅持。上位2選手との差は広がったが、4位以下との差は僅差で、最終日へ望みをつないだ。



第4ステージ 太地半島周回コース

最終第4ステージは太地半島周回コース。岡は総合3位を守るため積極的に前方で展開し、スプリントポイントでポナスタイムを獲得。中盤で逃げが決まるも、チームメイトの沢田や武山が集団牽引に尽力し、逃げを吸収。ゴール前は集団スプリントとなり、岡は9位でフィニッシュ。総合3位の表彰台を守り抜いた。

岡は「チームメイトみんなのおかげで総合3位を守れた。優勝には届かなかったが、ベストは尽くした」と語り、次戦ツアー・オブ・ジャパンへの意欲を見せた。鈴木監督も「目標の表彰台を守れて良かった」と評価した。

5日間を通じて、宇都宮ブリッツェンは困難な状況でも粘り強く戦い、チームの結束力と底力を示した。エース岡の安定した走り、仲間の献身が光ったシリーズとなった。



岡篤志、最終日逆転で ポイント賞獲得！

8日間769.5キロを駆け抜けたツアー・オブ・ジャパン2025。宇都宮ブリッツェンは岡篤志の京都ステージ優勝で勢いに乗るも、山岳で苦戦。しかし最終東京でチーム二丸の走りが実り、岡が劇的な逆転でポイント賞ジャージを手にした。苦闘と歓喜の全記録。

第1ステージ 堺



5月18日、大阪・堺から始まったツアー・オブ・ジャパン（TOJ）。全8ステージ、総距離769.5キロの日本最大級ロードレースに、宇都宮ブリッツェンは谷順成、沢田時、岡篤志、ルーベン・アコスタ、武山晃輔、菅野蒼羅の6名で挑んだ。

初日堺ステージは2・6キロ個人タイムトライアル。岡は過去優勝経験もあり期待されたが、惜しくも4位。

第2ステージ 京都



翌日の京都ステージから本格的なロードレースが始まると、沢田が逃げに乗り山岳争いで存在感を示す。そして最終局面、岡が冷静なスプリントで今季初勝利。これが自身TOJ史上最多となるステージ4勝目となり、総合リーダージャージも獲得した。

第3ステージ いなべ

しかし、三重県いなべステージでは、激しいアタック合戦とメカトラブルに苦しみ、岡はリーダージャージを失う。それでも「自由に走れる」と気持ちを切り替え、ステージ優勝とポイント賞を狙う戦いへシフトした。



第4ステージ 美濃

4日目の美濃は逃げ切りを許し、岡は集団で脚を休める展開。翌日からは山岳決戦。



第5ステージ 信州飯田

信州飯田ステージでは、岡が体調不良で大きく遅れ、チームも総合戦から後退。



第6ステージ 富士山

続く富士山ステージは、岡が中間スプリントポイントで2回トップ通過し、ポイント賞争いで逆転の足掛かりを作った。



第7ステージ 相模原

相模原ステージでは、岡が中間スプリントでポイント賞ハーチャルリーダーに立つも、13名の大逃げにベンジャミ・プラデス（VC福岡）が乗り、ステージ優勝と大量ポイントを獲得。岡は再び3位に後退し、最終東京ステージでの逆転が絶対条件となった。



第8ステージ 東京

迎えた最終日。大井埠頭の周回コースで、岡は中間スプリント1回目をトップ通過し、2回目・3回目も着実に加点。フィニッシュは集団スプリントとなり、岡とプラデスが僅差でゴール。結果、岡が1ポイント差でポイント賞ジャージを獲得した。

8日間、幾度も苦境に立たされたながらも、仲間の献身とファンの声援に支えられた宇都宮ブリッツェン。岡は「最後に笑って終わらせてすべてが報われた」と語り、監督も「ONE TEAMで戦えたことが何よりの収穫」と締めくくった。

今大会は、勝利の喜びだけでなく、失敗や苦しみを乗り越えるチームの強さが際立った。宇都宮ブリッツェンの新たな挑戦は、ここからまた始まる。



個人タイムトライアル 全日本選手権開催!!

日本一は栃木で決まる

2025 6/29 sun

Next Race

栃木市・渡良瀬遊水池

私たちは宇都宮ブリッツェンを応援しています。



Thank you for your support.

Blitzen 7